

キューバの医療事情

社会保障言論

地域まるごと  
問診・触診の実践



この夏、主宰するNPO活動の一環で、カリブ海に浮かぶキューバの医療事情を見聞した。社会主義国で開発途上国という大きな落差を超え、プライマリケアの大事さを学ぶ旅だった。

地域をくまなく歩く  
家庭医

キューバは、日本の本州のほぼ半分の面積に人口約1120万人。220万人余が暮らす首都ハバナの南西、高層住宅群の一棟一階にある「コンスルトリオ」と呼ぶ診療所を訪ねた。

机とカルテ棚と血圧計だけの診察室で、ペニヤ女医が独自の「ファミリードクター（家庭医）制度」を簡潔に教えてくれた。

家庭医と看護師で1181人の住民を担当、週2回は地域を回る。別に小児科医、産婦人科医、リハビリ職らが巡回診察する。すべて無料だ。

「高血圧や糖尿病の住民が多く、食生活の改善を働きかける。認知症も目立ち、103歳の患者もいる」。

同じ棟に看護師共々住み24時間対応

だ。「休めますか」と聞いたら「もう27年も勤め、いつでも会えるから夜中にドアをたたく人はいない」と、黒い大きな瞳を和ませた（写真）。

診療所は住民平均千人に1カ所、全国1万1605カ所に上る。通常は3階建てで2、3階に医師、看護師が住む。その典型的な農村部の診療所で、やはり女医は「全世帯を歩いて訪ねる」と、地域まるごと問診・触診の励行を語った。

1961年の社会主義宣言以来、米国の経済封鎖で締め付けられた。苦境



ペニヤ医師は「近くブラジルへ一時派遣される」という

下でも医療・保健に力を注ぎ、医師数は人口千人当たり7.5人(日本2.2人)、歯科医1.4人(同0.6人)。南北アメリカ諸国では最高水準の出産千人当たり乳児死亡率5、平均寿命79.1歳は、プライマリケアの成果だ(米国は6と79.3歳、2013年WHO調べ)。

## 健康づくりと病氣予防の徹底

前述のハバナ南西部の住宅地は人口3万人弱、診療所が25カ所配置される。この医療区域ごとに地区総合診療所「ポリクリニコ」が置かれる(全国で452カ所)。

傘下の家庭医や看護師、事務職も含め総勢約400人、歯科やリハビリ科もある病院規模だが、高度な医療機器はゼロ。ロペス所長は「地域ぐるみで健康づくり、病氣予防、リハビリに取り組む拠点」という。入院機能もなく、「必要なら病院へ移す。ただし、家庭医と家族が連携する、家庭内入院の方が有効かつ経費も安い」。

ハバナ医科大学3年生でキューバでは唯一の日本人医学生、新田真矢子さん

(28歳)に会った。「途上国の子どもたちを支援したい」と私費で学ぶ。

1、2年時は診療所などで実習した。「注射も採血も見よう見まねで、まず実践させられる。住民宅を回り、問診と触診をたたき込まれた」。

今春、ジカ熱が南米で流行りつつあった時、医学生2人1組が6日間計180戸で蚊の発生源の下水等に薬剤をまいた。「休講に反発する外国人留学生もいたが、私は参加した。珍しく飲み物とサンドイッチをくれた」と、小麦色に日焼けした顔で笑った。社会主義国らしい大動員である。

## 途上国のまま「少産・少死」へ

診療所、地区総合診療所、さらに病院がある。設備は日本とは対極で、人口100万人当たりMRIは0.8台(日本46台)、CTは4.8台(同101台)。それでもアルゼンチンのサッカー選手、マラドーナが薬物中毒の治療に通い、フランスの俳優アラン・ドロンが眼の治療を受けた。そんな話も聞いた。一部の医療水準は高いのだろう。

医師の月給は平均的な所得層の4.5倍だが、日本円換算で8000円程度。食料品類は配給制度が残り、米1キロ100円もしない。ただし配給量では半月も持たず、高値の自由市場で補うほかない。運転手や店員のアルバイトをする医師もいるそうだ。

豊富な人材とプライマリケアのノウハウを生かし、キューバは大災害時の人道支援を展開する。平時も南米を中心に医師を大量派遣する。こちらは、数少ない外貨確保策で、医師の、いわばボーナスにもなる。

米国との国交回復による効果はまだ見られず、経済は低迷する。その一方、合計特殊出生率1.60、高齢化率13.97%(15年世銀調べ)。医療・保健の普及が「少産・少死」つまり高齢化をもたらした。経済的には途上国のまま高齢社会へ突入した希有の例だ。

最小の投資・経費で乳児の死亡を抑え、長命を育む医療・保健の「原点」を、我々は見習うべきなのだろう。

■宮武 剛(みやたけ こと)

毎日新聞社・論説副委員長、埼玉県立大学、目白大学 大学院の教授を経て、財団法人・日本リハビリテーション振興会理事長、財務省「財政制度等審議会」委員やNPO「福祉フォーラムジャパン」会長も務める。